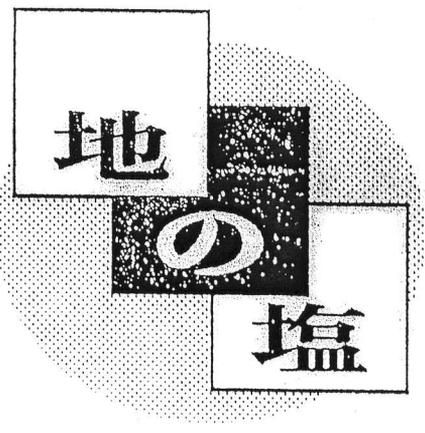


運動会の季節。駆けっこを心待ちにしている三人がいる。脚や手に障がいのある子どもたち。やっちゃんも両足が発育しないので通常は両手で歩く。5歳。野外活動の時は車いすを使う。回転もダッシュも自由自在。上半身はオリピックで金メダルをとったハンマー投げの選手みたいだ。トラックの内側にやっちゃん専用レーンがあり、彼はここを半周走る。ゆう君とひで君は、一つ上の学年。もうすぐ6歳になる。トラック一周を独特のフォームで走る。ゆう

君は飛び跳ねるように。ひで君は地面をこするように。速い。二人のためには特別のコースはないが、一緒に走る他の子どもたちはいつも抜かれそ



うになる。本番ではトップになるかも…▼周りの子どもたちは、彼らを自然に受け入れている。いい意味で「知らん顔」をしている。だが、ある日

こんなことがあった。ゆう君の格好がおかしいと一人の子どもがからかった。担任はその光景を見て悲しく思ったが、ゆう君がどのように反応するか見ていた。彼は毅然

か「世界でただ一人の存在」とかいうことが強調されている。それは決して自分勝手な意味での「わがまま」ではない。「あるがまま」であるということ。また「我(わが)がまま」ということ。そのことを認められると、人はどんなに救われることだろうか▼神が私を創

た。「そんなふうに教えてたことはないのに…」と担任は出てくる涙を抑えることができなかった。その話を聞いた親も、園長も感動した▼最近、「ありのままがいい」とか「そのままでもいい」と

つまらない私、と思っはいけない。こんな私…その私を神は少しずつ、もっと素晴らしい者に、もっと完全になるように導いてくださる。頑張